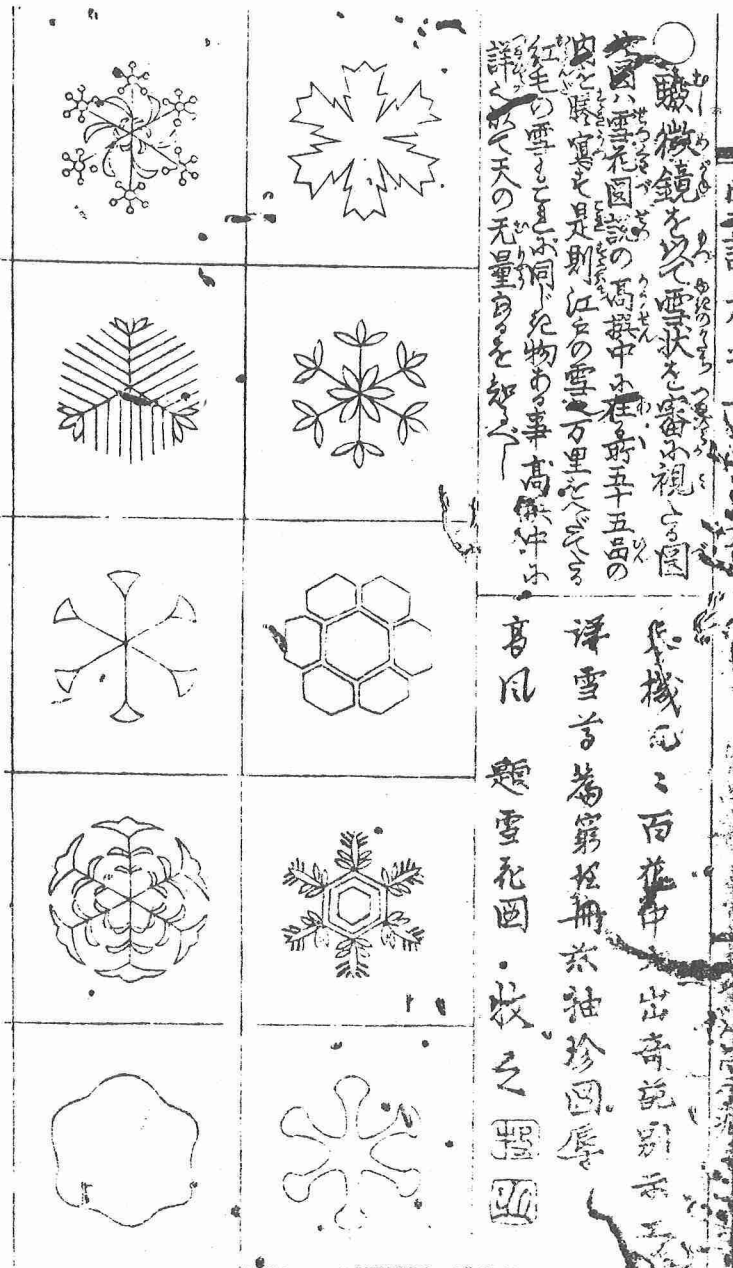


報 廣

東京大学理学部

(題字は柴田雄次名誉教授)



目 次

理学部 2 号館 の改修	吉川 虎雄… 2
地球物理研究 施設の一部移 転	福 島 直… 3
基礎有機化学 の一つの流れ	秋 葉 欣 哉… 4
故等松教授の 業績	福 島 直… 7
<学部消息>	10 ~ 11

北越雪譜 有名な鈴木牧之の北越雪譜の一部。雪の結晶の図は、あとの対頁と12頁だけであるが、35種類の結晶の記載がある。天保六年刊。(S)

理学部 2 号館の改修

吉川 虎雄 (地理)

昨年の暮も迫ったところから、理学部 2 号館の改修工事が始まった。北翼部の外壁にそって足場が組立てられ、もとの間仕切りや新しい開口部が取りこわされるとともに、新年早々には古いサッシの取りはずしも始まって、工事は急速に本格化しようとしている。

理学部 2 号館は完成後 40 数年をへており、最近では、外壁化粧タイルの剝落、屋上からの雨漏り、サッシの腐食、水道の多量の漏水など、建物の老朽化が進んできた。ことに、ここで研究教育を行ってきた生物学・地学 6 教室とともに、この建物が建造された昭和初年にくらべて、その研究内容が大きく変わり、多くの実験測定機器が導入されたために、年々電気・水・ガスの需要がふえ、従来の配線・配管ではいちじるしく不足するようになった。そのため、すでに何度かそれらの増強工事が行われたが、昨今では、大規模な改修なしには、もはやそれらの増強も限界に達したとともに、危険の発生さえも心配される状態になっていた。

このような状況から、理学部 2 号館の全面改修はかなり早くから考えられてきた。しかし、当時ここにいた 6 教室は、狭い空間に多くの人員と多量の機器・標本・資料などがかかえており、改修期間におけるそれらの移転について方策がたたなかったために、改修計画の推進を見送らざるをえなかった。幸いにも、理学部 5 号館の完成にともなって、地質学・鉱物学両教室の大部分が移転したために、多少の余裕を生ずるとともに、ここに残る動物学・植物学・人類学・地理学 4 教室がその移転跡地を利用するにあたって内部改装が必要になった機会に、全面的な改修工事が行われることになったのである。

改修計画は数年前から建物委員会を設けて検討されてきたが、その検討が具体的になったのは、理学部 5 号館の建造と地質学・鉱物学両教室の移転とが決った後のことである。改修計画の立案にあたっては、単に建物の補修と内部改装に止めず、理学部 2

号館を近代的な自然科学の研究教育の場に改善することが基本方針とされてきた。しかし、改修予算がかなり削減されたために、建物の補修についてはまだしも、設備の改善計画はかなりの後退を余儀なくされた。また、改修期間における研究教育の不便を慮って、改修工事が単年度の間を実施されることを希望してきたが、これも予算の関係から 2 年度にわたることになり、本年度は第 1 期工事として北翼部 4,358 m²が改修されることになった。改修完了後の教室などの配置と主な改修事項は、次のようである。

1. 理学部 2 号館に残る 4 教室の現在の配置はかなり入りくんでおり、教室ごとのまとまりに欠けているので、この機会にその再配置をはかることになった。改修完了時には、動物学教室は北翼部の地階・1階、および 2 階の一部を、植物学教室は南翼部の地階・1階、および 2 階の一部を、人類学教室は 3 階北翼部と南翼部および 4 階の一部を、地理学教室は 2 階および 3 階の南東部を、地質学・鉱物学両教室が 3 階南西部の一部を、それぞれ占めることになる。また、4 教室の図書室と地質学教室の残存書庫が 2 階中央部にまとめて配置され、地階北東部には RI 分室が従来よりやや拡張されて設けられる。内部の改修設計はこの再配置案にもとづいて行われるが、改修にともなって変電室・機械室などの共用部分が多少拡張されるので、第 2 期工事の南翼部の改修設計ができた段階でないと、各教室が研究教育に直接利用できる面積は確定しない。その段階で、理学部各教室の資格面積にもとづいてたてられた配分案に従って、ここに残る 4 教室の占有部分が確定し、なお多少の余剰があれば、全体としては基準面積に不足する理学部としての利用が検討されることになる。

2. 建物の補修では、外壁の破損箇所および屋上ルーフィングの補修、サッシの全面的な取替え、間仕切りの変更、床・天井の一部の補修などが行われるが、外壁の洗浄は取止めになった。また、老朽

化した屋上の仮設建造物や1階南側の旧温室は、その一部が排気用機械室に利用される他は、取こわされる予定である。

3. 設備関係の改修は当初の計画にくらべてかなり縮小されたものになる。電気・水・ガスの配線・配管は改善されるが、全面的な更新は見送られて、一部はもとのものが利用される。暖房設備は新設されるが、実験用空調設備は当初計画から大巾に縮小されて、ほぼ現状に近い状態に止まる。大型重量器材運搬のために希望していたエレベーターの新設も、第1期工事では見送りになった。また、改修後4教室が拡張した部分で必要となる設備調度品の購入は改修予算には含まれないので、別途に予算をうる必要がある。

初めにのべたように、改修工事は昨年末から始まったが、これに先立って、改修部分をあげるために、研究室・講義室の移転や機器・標本・資料などの移動・格納を行った。幸いにも、理学部1号館や大学本部・付属図書館などの御高配をえて、次のように分散して移転・格納した。

1. 理学部1号館の数学教室移転跡地に合計約570㎡の24室を借用して、研究室・講義室の一部を移転した。

2. 安田講堂内にある総合図書館の保存書庫に約800棚の書架を借用して、図書の一部を格納した。

3. 新大学本部建設予定地の地下にある車庫と機械室の一部を借用して、器材・家具・図書などの一

部を格納した。

4. 理学部2号館の改修工事が行われない片翼部を4教室に再配分し、残りの研究室・講義室として利用している。

以上が主な移転・格納先であり、他にも大学の内外に移動したのがある。しかし、直接研究教育に利用しうる面積は、従来の使用面積の2分の1強にすぎず、きわめて狭い場所で、しかも散在して、研究教育を行っているのが現状である。しかも、器材・図書・標本・資料などのかんりの部分を格納したので、関係4教室はもとより、学内の利用希望者にも、改修期間中はかんりの不便をおかけせざるをえない。さらに、第2期工事の際には、本年度より広い面積の改修が行われるので、理学部2号館で利用しうる面積が本年度よりへるとともに、さらに追加して格納すべき器材・標本などがあるので、その対策に今から頭を痛めている。

ともあれ、長年の懸案であった理学部2号館の改修は、当初の計画からはかんりの後退を余儀なくされたとはいえ、ようやく軌道にのった。周囲の共同溝の工事と重なって、現在理学部2号館は工事現場のさなかにあり、内外の方々に多大の御不便をおかけしている。この機会に、理学部の皆様方や学内の関係者の方々からこれまで理学部2号館の改修によせられた御理解と御高配にあつく御礼申し上げるとともに、今後とも一そうの御支援を賜るようお願いしたい。

地球物理研究施設の一部移転

福 島 直 (地物研)

昭和52年11月下旬に、地球物理研究施設の一部は理学部3号館南側プレハブから理学部1号館4階に移り、また理学部3号館地域でも移動が行なわれました。この結果、地球物理研究施設教職員配置は、現在次のようになっています。

室番号	使用者	電話番号
1号館 443	福 島	7511 (番号不変)
" 441	玉 尾	3814 (新番号)

1号館 439	佐 藤	3813 (新番号)
" 444	飯 島	3842 (新番号)
" 442	(文献室)	
" 440	大学院生室	3955 (新番号)
" 437	事務室	3812 (新番号)
3号館南プレハブ 東棟南室	小 口	4321 (番号不変)
3号館南プレハブ 西棟2階中室	国 分	6476 (変更)

3号館南プレハブ 西棟 2階南室 金田・小川 6476 (不変)
3号館南プレハブ 東棟北・中室 大学院生室 6475 (不変)

3号館 420 B室 林・鈴木 2693 (移設)
" 316 室 実験室 3693 (不変)

基礎有機化学の一つの流れ

秋 葉 欣 哉 (化学)

最近の代表的な有機化学の教科書を開くと、その冒頭に、有機化学とは“炭素を含む化合物の化学”あるいはもう少しきつく“炭素化合物の化学”であると定義されている。

確かに有機化学は前世紀以来、炭素を中心として、水素、酸素そして脇役として窒素を含む数百万の化合物の骨格合成、立体化学、反応機構、天然物の化学などの分野で、その発展はめざましく、その範囲で興味ある事実が続々と発見され、理論も発展した訳である。

現在では、不斉炭素を何コも含む複雑な化合物でも必らず構造決定し、フラスコの中で合成できるという信念が常識となっているのはすばらしい成果である。

それらの中でも、反応機構の分野は最も洗練されたものであろう。有機反応機構論は、きれいな単純化された溶液内の有機反応を詳細に検討して、反応に共通な要素を浮き彫りにし、その本質を明らかにしようという方向の研究であるといえるだろう。そのための具体的方法としては、以下の項目の検討をまず念頭に置くと思われる： 1) 速度測定、2) 置換基効果、3) 溶媒効果、4) 同位体の利用—速度同位体効果およびトレーサーとして、5) 軌道の対称性と光照射の効果。

以上のような検討に耐え得る反応系は、有機化合物としては、必然的に単純なモデルとなり、その対象は主としてC, H, Oの化学であり、それらは分子軌道法や電子計算機を用いる理論計算のよいモデルとなり、反応機構を絵に描いたように見せてくれるようになる程の発展をした訳である。

一方、この発展の過程において、検討の対象からはずされた分野も多いわけである。この過程は、大きな例をもちだせば、有機化学全体の発展の歴史に

似ていると言えるだろう。

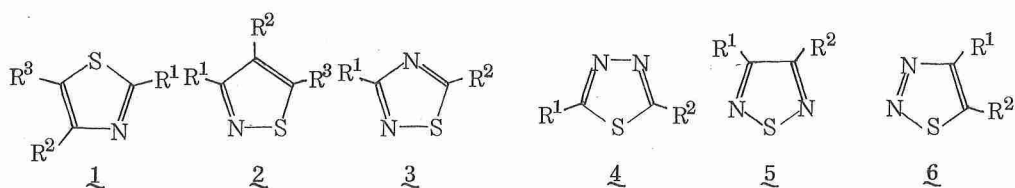
すなわち、有機化学は生体が生命力によって作り出す物質を扱う化学として発展し、19世紀前半までは、生命力という基準によって、無機化学と明瞭な一線を画していると信じられていた。“生命力”はその後の発展によって捨てられ、冒頭の定義のように炭素化合物の化学として、有機化学の分野が定着した訳である。一方、この過程の中で置き去りにされて来た部分は何だったろうか。反応・合成につきものの、やっかいものの“タール”や残渣であり、また窒素などの異種原子を多く含む複素環化合物やリン・硫黄など第三周期元素の有機化学などだろう。

“タール”などの化学は、オリゴマー、ポリマーの化学として、高分子化学者によって発展させられ、“生命力”により近い蛋白質や核酸塩基などの複素環化合物の化学は生化学・薬学者の手にゆだねられて来た。

前置が長くなったが、有機過酸化物の分解機構を対象として、反応機構の分野における研究を大学院時代に行なって感じたことは、1) 有機化学としては、せめてもう少し複雑な化合物を扱うところに、一つの本質があるのではないか、2) 今迄の対象から殆んどはずされていて、生体に関係の深い、複素環化合物やリン・硫黄化合物の反応は今後系統的に研究されるべき問題が多いのではないか。

(事実、今迄の反応機構の分野は行きつく所へ行きついた感があり、その壁をこえることは困難である一方、その方法論は常識化して、ことに米国を中心として、10年前位から衰退の著しいものがあると思うのは筆者ばかりではないであろう)

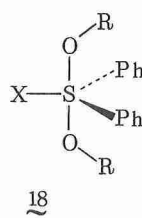
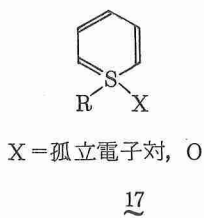
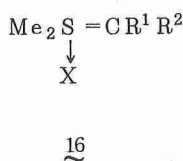
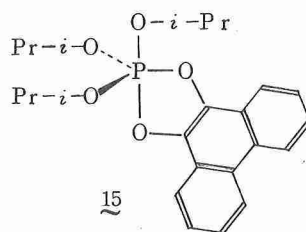
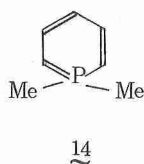
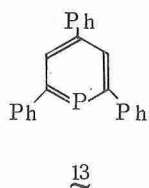
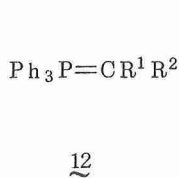
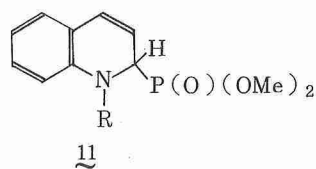
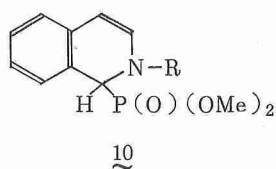
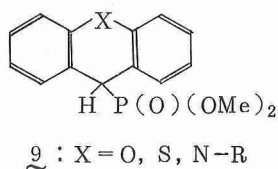
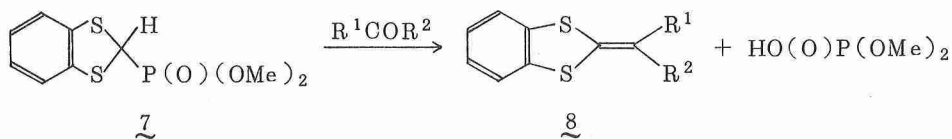
筆者らは数年来、窒素、硫黄などを含む複素環化合物を研究対象としてとり上げてきた。最も簡単な例をあげよう。ここにチアゾールとチアジアゾール



の異性体を示したが、このような簡単な分子の構造（原子の結合の順序、置換基の位置）をきめることすら、“通常”のIR, UV, NMRおよびMSのデータからは困難なことが多い（もちろん、各化合物に特有の合成法などは既知である）。

複素環に種々の置換基を導入することは一般に困難であり、場合に応じた合成法を別個に考案する訳である。最近筆者らは7から多数の8誘導体が容易に得られることを示した。9, 10, 11が得られており、これらはP(O)(OMe)₂をCNに置き換えると古くから知られているReissert化合物となるが、この方法は複素環に対して置換基を導入する一つの新法になるとと思われる。

リン・硫黄原子の性質に中心を置いた例をあげよう。12, 16はイリドであり、CR¹R²基をtransferする有用な合成試剤として利用されている。最近17, 18に関する研究が活潑に行なわれ、リンと硫黄化合物の反応、構造における対応が明らかになって来た。15と18は基本的には三方両錘構造（TBP）をとり、ap結合はeq結合より長く、ap結合は3中心4電子結合としてよく理解され、原子価を拡張しているにもかかわらず、d軌道の関与が殆どないと言われている。最近までは、第三周期元素の原子価拡張した状態には、全てd軌道が強く関与していると思われていたが、上のように、σ-hypervalentなリン・硫黄結合にはd軌道の関与を大して



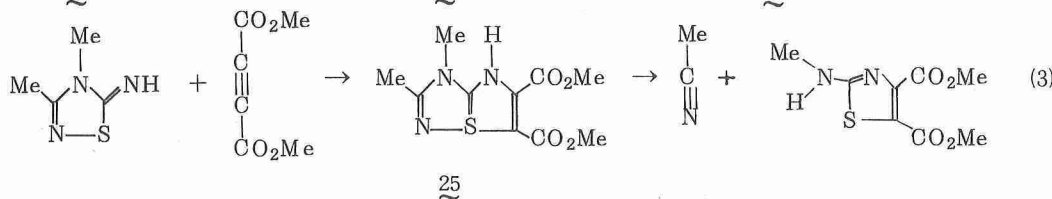
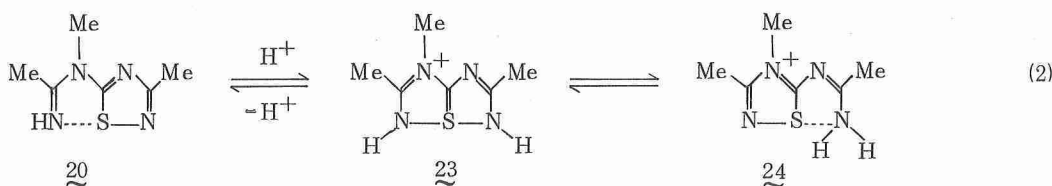
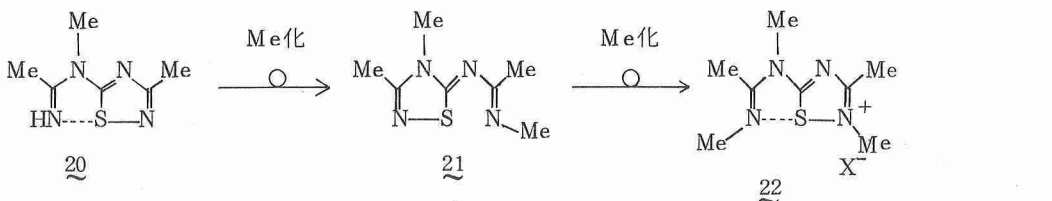
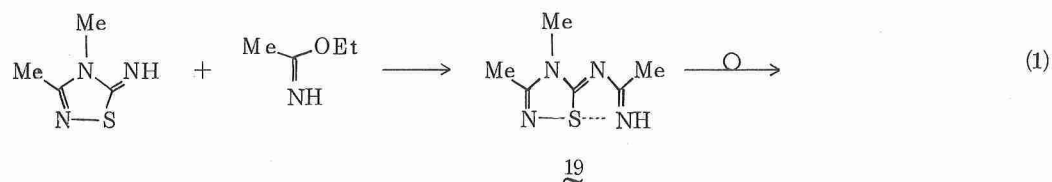
考えなくてよいことが明らかになって来たのも、ここ数年来のことである（もちろん、 π -hyper-valentやイリドの場合はd軌道の関与が重要と思われるが、その大きさを評価する適切な方法がない）。

17 (X = 孤立電子対) はチアベンゼンである。17およびその類縁体の合成と性質に関して、1961年から1972年にかけて、米国において活潑な研究が行なわれたが、その主要な部分が誤りであることが、別のグループによる再検討によって、1974年に明らかになった。最近においても“大間違い”が起こるといふことは、この分野が未知の部分が多く抱えた興味ある分野である証拠だろう。

これに関連して、筆者らが最近見出した反応の一例をあげよう。(1)式では、19が得られるはずであ

$N \cdots S$ は 1.98 \AA 、 $S-N$ は 1.83 \AA であった。20にトリフルオロ酢酸を加えると、20と24の間に速い平衡があることがNMRによって観測された。すなわち、22と極めて類似した23のような遷移状態を通り、 $N-S$ 結合の交換が起きている。これは中心のC-S結合が左右へ 0.4 \AA ずつ振子のように振動していることになる。(3)式の反応も25を経て進むものと考えられる。すなわち、これらに共通で重要な役割をしているのは、原子価を拡張した硫黄原子(hyper-valent sulfur)であることがわかる。

複素環の化学は、我国では薬学および製薬会社の化学として発展して来たといっても過言ではないであろう。事実、筆者が始めて参加・講演した第5回複素環化学討論会(1972年)では、理工系学部の研究



るが、実際の構造は20であり、それをメチル化すると21になり、さらにメチル化すると22となる。すなわち、各段階でN-S結合が交換しているわけである。これらの構造は ^1H -と ^{13}C -NMRによって決定されたが、最終的にはX線回析によった。20の $N \cdots S$ 結合距離は 2.50 \AA 、 $S-N$ 結合は 1.67 \AA であり、22の

室からの講演は36件中4件であった。第6回から、“化学と工業”に討論会のプログラムが掲載されるようになり、昨年の第10回討論会では、59件中23件が理工系学部の研究室から発表された。理工系の人達の関心が急速に高まっていることがわかる。

現在非常に活潑に研究されている生体反応のシミ

レーションは、一つにはおだやかな条件で立体構造を含めて選択性のよい炭素骨格合成の追求であり、他方には生体内物質である多くの複素環化合物の合成・変換、弱い相互作用の積み重ねによる反応コントロールの機構の解明などであろう。有機化学が炭

素化合物の化学として開花する過程で捨て去ったり、隅に置いて来たこれら龍大な分野を、既に修得した解析方法・成果を踏まえて、とり組み直す時期に来ているのではないだろうか。

故等松教授の業績

福島 直（地物研）

1. はじめに

等松教授は昭和52年11月19日に45才の若さで脳血栓のため急逝された。同教授の略歴や諸活動の概略については、既に学内広報No.388（1977. 11. 28）に掲載されているので、本稿では故等松教授の学問的業績について述べてみることにする。同教授は八面六臂の活躍をされていたので、その全部を記することは到底できないので主だったことだけに限らせていただくことを、あらかじめお断りしておきます。

2. 超高層大気物理学専攻の発端

等松教授が生まれた昭和7年は地球物理学とくに超高層大気物理学にとっては記念すべき年であった。というのは昭和7—8年に世界各国が協力して、とくに極地域の気象、地球磁場変動、極光などの研究を有効に促進する磁場変動、極光などの研究を有効に促進するために世界共同観測が実施されたからである。この期間は第2回国際極年（正式には1932年8月から1933年8月の間）と呼ばれている。因みに第1回国際極年はそれよりも50年前、すなわち1882年～83年に行なわれており、当時大規模な国際共同観測は50年おきにしようと取決めしたので、世界的経済不況の直後ではあったが昭和7—8年に実施された。このとき、日本では富士山頂測候所がつくられ、樺太豊原に地磁気観測所が設けられた（この豊原観測所では現在ソ連が観測を継続している）。第2次大戦後、科学技術が急速に発展しているので国際共同観測を、第2回国際極年から50年後とはいわず25年後にしてはどうか、しかもその時（1957年—58年）には太陽活動極大期になる筈であるし（1932年—33

年は太陽活動極小期であった）、平和がよみがえった世界で各国科学者が協力して共同観測事業を行なって地球およびその周辺空間に対する理解を深めようではないかとの提案が出された（この提案は1950年4月に米国バンアレン博士邸で開かれたパーティーの席上で、このような話題が出たことに源を発している）。当時東西両陣営の冷戦はあったが、1953年にソ連のスターリンが没し、東西冷戦の雪融けムードが高まり1954年秋にはソ連もこの事業に参加する声明を出した。数年間の準備期間のうちに、来る共同観測では極地域のみ重点を置くことなく、全世界でなるべく多くの観測網を整備することにとめることになり、名称もこれまでの「極年」を改めて「国際地球観測年」と称することにした。日本が南極観測を開始したのも、またロケット・人工衛星観測への道を歩むことになったのもこの「国際地球観測年」が契機となっている。

等松教授は、国際地球観測計画が練られている時期に学部生活を終え、大学院に入学してからは、永田教授（現国立極地研究所長）の研究室に入り、日本における国際地球観測年事業の一部である大気光の掃天観測を全国観測網の一環として茨城県柿岡の東京大学理学部用地で実施した。この大気光観測は、古畑正秋教授（元東京天文台長）が全国の観測を総括推進した。米英両国では国際地球観測年事業のPR映画を計画し、世界各国での準備状況を撮影してまわり、その映画では若き日の等松教授が役者として大気光観測の演技をしている。

こうして大気光の観測を手はじめに等松教授の多彩な研究がはじまる。等松教授の葬儀の際に理学部

長が読まれた弔辞の中に、「地球超高層大気および惑星間空間における発光現象を手がかりとして、光化学反応と量子過程を詳細に研究し、地球周辺空間の研究に新しい重要な面を開拓し、わが国のこの分野の研究の国際的水準を高める上に指導的役割を果たしてきました。また同教授は大気球ロケット・人工衛星を用いての地球周辺空間研究事業においても中心的存在であり、また南極観測における貢献も大きく、地球環境解明のための諸研究において、国内はもとより、国際的にも高い評価を受けておられました。」とありましたが、これを具体的に示す主な業績を次にまとめてみます。

3. 主要業績のまとめ

1. 大気光励起機構とその大気物理学的意義の研究

- 1.1 大気光の主要輝線である酸素原子 5577\AA の観測結果をもとに、その時間・空間変化を超高層大気の動きと結び付けて解釈することに成功した。
- 1.2 大気光酸素原子 6300\AA の分光観測法を開発し、その方法による観測結果をもとに励起機構と大気構造の関係を求めた。昼間大気光のロケット観測を実施。
- 1.3 中間紫外域($2000-3000\text{\AA}$)にも酸素分子の大気光励起があることを理論的に予見し、ロケット観測により実証した。
- 1.4 水酸基(OH)大気光の強度および振動温度の季節変化を、大気微量諸成分間の光化学的過程によって説明しえた。
- 1.5 酸素原子の紫外大気光 1304\AA の励起機構を理論的に究明し、励起温度と超高層大気の素過程との関係を明らかにした。

2. 極端紫外域地球コロナ、惑星間グローに関する研究

- 2.1 地球周辺空間で太陽放射をHeが共鳴散乱して 584\AA グローを出すこと、太陽風プロトンと惑星間空間ヘリウムとの反応で 304\AA グローが出ることを予知。
- 2.2 極端紫外域での検出装置を開発し、ヘリウム・水素グローの存在をロケット観測で実証した。

3. 電離層生成の量子過程の統一的理論

- 3.1 太陽放射によって生ずる光電子と大気量子物理過程を刻明に追跡し、超高層大気における光電子の役割とふるまいを明らかにしえた。
- 3.2 夜間の電離層の成因は、地球コロナ紫外線が大きな役割を演じていることを示した。また電離層状態が大気潮汐に支配されていることも明らかにした。

4. 中間紫外放射を利用した大気微量成分の検出

- 4.1 太陽紫外線を利用する吸光法によってオゾンを定量的に求める方法を開発し、ロケット実験によって信頼しうるオゾン高度分布を求めた。
- 4.2 下部電離層生成に主要な電離源であるNOを測定する測光計を開発し、NO高度分布を小型ロケットで求めた。

5. 大気オゾン測定システムの確立と環境物理学への応用

紫外吸収法、紫外散光法、化学当量法の三方法を併用して、対流圏から中間圏までの広範囲にわたって、大気球および観測ロケットでオゾン密度分布を求める方法を確立した。これにより成層圏大気汚染、地球環境長期変動の予知などの議論を行なう手がかりを与えた。

6. 極光観測新装置開発

日本の南極観測隊のためにtilting filterを用いる子午面内掃天測光装置を開発し、昭和基地における極光観測に大きな成果をもたらした。また南極昭和基地で打上げるロケットに搭載するための計器の開発も行ない。極光出現時に超高層大気中で発生している諸現象を直接検出する研究に大きく貢献している。

これらの一連の業績により、等松教授は、昭和49年に日本地球電気磁気学会からの推薦で第11回松永賞を受けている。また同教授の初期の業績に対して、昭和38年に日本地球電気磁気学会から田中館賞が贈られている。

4. 最近の諸活動の一端

等松教授は上記の如き研究成果をあげていたため、内外から研究指導者としていろいろと頼まれることが多かった。学会活動にしても、日本地球電気磁気

学会の運営委員と編集委員，日本分光学会理事をつとめていた。

また環境科学関係の諸研究会でも指導的立場にあった。日本学術会議関係では，宇宙空間研究連絡委員会委員，電波科学研究連絡委員会電離層分科会幹事をつとめ，また国際協力事業特別委員会STP分科会研究観測小委員会では今後の国際共同観測計画（後出）立案の中心推進役であった。またこのほか国立極地研究所の専門委員，宇宙開発委員会あるいは宇宙開発事業団，未来工学研究所などからの依頼を受けての仕事も受持っていた。

東京大学においては，理学部における教育と研究に尽力する傍ら，宇宙航空研究所の研究担当をつとめ，同所における大気球・ロケット・人工衛星による観測に大きく寄与していた。とくに光に打上げられた科学衛星TAIYOの計画を推進し，また昭和58年度に打上げる予定のEXOS-Cの計画責任者になっており，日本における人工衛星計画の中心的人物の一人であった。等松教授は倒れる前日に本年3月に宇宙航空研究所で開催予定の国際シンポジウム（欧州のAEROS，日本のTAIYO両衛星による観測結果を持寄るための会）組織者として，先方にプログラム原案を書き送っている。

また，国際協力ロケット観測事業にも特別に深く関係しており，昭和51年3月にインドに出張されたときのことは御本人が理学部広報に寄稿している。昨年夏は米国およびカナダに計2ヶ月ほど滞在し，その間カナダでは将来の共同観測計画のための打合せ，米国シアトルでは国際地球電磁気学，超高層大気物理学協会（IAGA）の学術総会に出席し，ご自身および同僚の研究成果を発表するかたわら，いろいろな計画打合せなども行なっていた。特に1980年代に行なわれる予定のMiddle Atmosphere Program（気象学で扱う領域と超高層大気物理学がこれまで扱ってきた電離層領域との中間領域を，両方の立場の研究者が手を結んで集中的研究を行なう計画）について，等松教授は日本の計画を発表し

て賞讃を博した。この日本の計画というのは，一昨年以來等松教授が中心となって日本の各方面の研究者と連絡をとりながらまとめてきたものであった。等松教授は世界のMAP計画の主導的役割を果す期待を担っていた。

等松教授は永田教授と共著で裳華房から「超高層大気の物理学」と題する名著を出版している。そのまえがきの一節に次のような文がある。「本書全体として超高層大気物理学と題するに恥かしくないよう全分野のバランスに充分注意をはらったつもりである。超高層大気の物理現象としてのバランスはもちろんであるが，物理学的立場としても連続体物理学，統計力学，原子分子物理学の3立脚点の調和を図ったものである。（中略）超高層大気物理学として本書の内容ほど全体の問題を包含した成書は，現時点ではどこにも見当たらないと自負している。この意味で本書が超高層大気物理学に新しく入門する若い人々や超高層大気に関係ある他部門の研究者達にとってよき相談相手になるだろうことを望んでいる。これはまさに等松教授自身が開拓してきたことなのである。この本は1973年11月に発行されているが，等松教授はその後ご自身の研究や世界でのこの方面の進展をも入れた上で英文で刊行することを計画し準備をすすめていた。もしその本が完成していたら世界的名著として賞讃を博したことであろう。

最後に最近B.A. Tinsley博士（国際地球電磁気学・超高層大気物理学（IAGA）Aeronomy部会長）から受取った手紙の一節を紹介したい。同博士は等松教授の急逝を悼み，日本が，また世界が等松教授を失なった損失がいかに大きいかを歎き，1979年に予定されているIAGA総会の折に開くことになっている「中緯度地域における太陽光以外の電離源」シンポジウムを「等松隆夫追悼シンポジウム」と命名することを考えていると述べている。このシンポジウムは等松教授が世話役になることを受諾していたものである。

<学部消息>

12月理学部会合日誌

12月12日(月)	理職定例交渉	12:30~14:00*
" 12日(月)	理系委員会	15:00~16:00
" 14日(水)	教務委員会	13:30~15:45
" 14日(水)	会計委員会	13:30~14:30
" 19日(月)	幹事会	12:30~14:00
" 21日(水)	人事委員会	10:30~12:00
" 21日(水)	教授会	14:00~16:25
" 23日(金)	教室主任会議	11:00~12:25

2. 人事異動報告
3. 人事委員会報告
4. 会計委員会報告
5. 教務委員会報告
6. 寄附の件
7. その他

53年1月19日(水) 定例教授会

1. 前回議事承認
2. 人事異動報告
3. 理学部規則一部改正について
4. 人事委員会報告
5. 会計委員会報告
6. 教務委員会報告
7. 学部長候補者選出
8. その他

教授会メモ

52年12月21日(水) 定例教授会

1. 前回議事承認

人事異動

(講師以上)

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
分光化学	助教授	岩村 秀	52. 12. 1	分子科学研究所教授昇任	
化学	講師	秋葉 欣哉	53. 1. 1	教育職(一)2等級(東京大学助教授理学部)に昇任させる	

(助手)

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
情報	助手	三好 和憲	52. 12. 1	筑波大学講師昇任	
素粒子物理		小林 富雄	52. 12. 1	助手に採用	
植物		大隅 良典	52. 12. 11	助手に採用	
植物		新免 輝男	52. 12. 11	助手に採用	
地物	運輸技官	中村 一	53. 1. 1	助手に転任	気象庁から
植物園	助手	大場 秀章	53. 1. 1	助手に配置換	総合研究資料館から
物理		日向 裕幸	53. 1. 1	助手に採用	
素粒子物理		武田 広	53. 1. 1	助手に採用	
数学	助手	山崎 正	53. 2. 1	九州大学講師昇任	(理学部)
地質	助手	堀 越 勲	53. 4. 1	富山大学教授昇任	(理学部)

(一般職員)

所属	官職	氏名	発令年月日	異動	内容	備考
物理	技官	荒井正彦	52.12.31	勸しょう退職		
一号館	用務員	石田年雄	52.12.31	勸しょう退職		

12月海外渡航者

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
物理	助手	水島公一	連合王国	12.21 ～ 53.12.20	物性物理学の研究のため
化学	教授	向山光昭	アメリカ合衆国	12.3 ～ 12.10	有機合成化学に関するシンポジウム出席のため
地球物理	助手	浜野洋三	アメリカ合衆国	12.4 ～ 12.14	深海底掘削計画第51, 52, 53次航海後会議およびAGU(米国地球物理学連合)12月会議出席のため
数学	教授	藤田宏	フランス	12.3 ～ 12.11	I. R. I. A (情報科学・自動制御研究所)シンポジウム出席のため
数学	教授	服部晶夫	台湾	12.10 ～ 12.20	幾何学とトポロジーの会議に出席および講演, セミナー指導のため
情報科学	教授	山田尚勇	台湾	12.21 ～ 12.30	情報科学の講演と1977年国際計算機会議出席のため
動物	教授	高橋景一	アメリカ合衆国	12.31 ～ 53.1.9	ゴードン研究会議に出席のため

編 集 後 記

広報の記事にした方がよいというものがあ
りましたら、ぜひお知らせ願います。

編集：

木 下 清一郎(動物)	内線3361
鈴 木 秀 夫(地理)	内線3288
田 隅 三 生(化学)	内線3148